

松陰の事を研究するには、先づ藩主毛利忠正公の事蹟及び公と松陰との關係を知らなければ其真相を明かにする事が出来ない事です。今其一例を挙げますれば、松陰が十一の時、進講しまして藩主に神童と認められたが始めで、以後度々の進講に當り公は特別に傾聴せられたと云ふことですが、二十一歳の時武教全書、守城篇、籠城の大將心定の條を進講しまして頗る藩主を感動せしめましたのは知遇を得た始めと云つてもよく其翌年藩主は松陰に就いて山鹿流の傳授を受け、引續き孫子の進講を命ぜられなどして、其際に御議論等有つた事もあり、松陰は公の英邁にして志氣凜然たる事を親しく拜察したりと度々家兄に話されたさうです。又江戸藩邸を逃亡し

て東北に遊びました時、藩主が此事を聞かれて、國の寶を失ひたりと嘆惜されたさうで、翌年其罪にて祿を奪はれた時も、藩主は益々之を惜みまして、時機を待ちて再び祿を與へやうとの御考であつたらしく、實父へ十ヶ年間遊歴を願ひ出る様内諭ありました、松陰は於此一層藩主の知遇に感激しまして國恩に報ひんとを期するに至つたさうです。其後、松陰の時事に關する建白及び論策等は、皆藩主の内覧に入れまして、又藩主より意見を求められました事もあります。去れば、最後の語諸友書中に、「甲寅後幽囚在國而吾公眷顧不衰是今日宜爲吾公死也」としましたのを見ても松陰の決心の程が、充分に推察される次第であります。(筆記)

吉田松陰先生の神髓

野村 靖

松陰先生の事を話すと云ふも、先生の神髓を得る様に語るが如きは、到底出来難い事である。況んや先生の傳記を書いて、其精神面目を人に知らせやうなど云ふ事は、絶對的不可能と云つても宜しい。夫れに就てかう云ふ事がある。先生の死後、間もない事であつたが、鹽谷岩陰の塾頭をして居た、土屋蕭海、名は根、通稱彌之助と云ふ男、餘程の文章家であつたが、松陰先生の傳を書くに云ふ事で、大分書きかけて居

たのを、高杉晋作が見て、何だ！こんな物を先生の傳記とする事が出来るか、と云つて引裂き捨てた事があつた。其後は國事多端の爲めに、先生の傳を作ると云ふ暇もなく打過ぎたが、御維新後に至り、相談の上、長三洲なら宜からうと云ふ事で、材料等を見せたが、三洲は熟考して見て、之は到底自分の力で、先生の神髓を傳ふべき傳記を書く事は叶はないと辭退した。其後先生の傳記を作らうと企つる者もなく、托すべき人

吉田松陰先生の神髓

二九

肉親・弟子・評論家など 生き証人を含む

明治の見た松陰像 刑死五十年記念出版

限定五百部復刻

日本及日本人臨時増刊

松陰號

第四百九十五号



マツノ書店



『日本及日本人』吉田松陰特集号について

東行記念館副館長・学芸員 一坂 太郎

近代日本におけるジャーナリストの巨頭と言え、まず思い出されるのが、徳富蘇峰(猪一郎、熊本出身)と三宅雪嶺(雄二郎、石川出身)の二人であろう。

明治中期、蘇峰は民友社を創立、雑誌『国民之友』を創刊して平民主義を創出、鼓舞し一世を風靡した。同じころ雪嶺は、政府の専制主義と欧化主義に批判的立場をとり、同志と共に政教社を設立し、雑誌『日本人』で国粹主義を唱える。この対照的な二人が、共に「吉田松陰」を論じた著作を残していることは興味深い。

蘇峰のは明治二十六年(一八九三)十二月、民友社から出版された『吉田松陰』である。この著書で蘇峰は「革命家」「革命的急先鋒」としての松陰像を打ち出した。「彼が殉難者としての血を濺ぎしより三十余年、維新の大業半ば荒廃し」と、藩閥政府に対する現代批判を込めながら「第二の維新」「第二の吉田松陰」の出現を望みつつ、若々しく反骨精神漲る蘇峰の筆はおかれている。

にもかかわらず、明治二十七、八年の日清戦争を正当化し、明治三十年には第二次松方正義内閣の内務省勅任参事官に任じられた蘇峰は、政界との接触の頻度・密度を急速に強めてゆくことになる。元来、政府を批判しながらも、政治家とのパイプは抜け目なく保っていた男だ。世間はそんな蘇峰を藩閥へ降伏したと非難し、「民友社」は「官友社」になったと、嘲笑した。

日露戦争で日本が勝利し、帝国主義指向が不動のものとなった時期、蘇峰は旧著『吉田松陰』を全面的に改稿し、世に送る。発行日は奥付によれば、明治四十一年十月十二日。改訂版は、元版にあった「革命」という文字が全て削除され、「改革」に置き換えられた。また、「革命家としての松陰」や、十九世紀のイタリア統一運動「三傑」の一人マッツィニと対比した「松陰とマヂニ」の章は完全に削り取られ、かわりに「松陰と国体論」といった章が加えられる。

蘇峰が『吉田松陰』改訂版を出したこの年は、松陰が「安政の大獄」で処刑されてから、五十年にあたった。十月十七日には帝国教育会が、松陰没後五十年の記念大会を催している。そして十月十八日、三宅雪嶺もまた自ら主宰する雑誌『日本及日本人』の四百九十五号(臨時増刊)で吉田松陰特集を組み、政教社から発行した。雪嶺を始め吉田庫三・野村靖・乃木希典・中原邦平・杉浦重剛・長谷川芳之助・三宅花圃・松宮春一郎・横山健堂・河東碧梧桐といった、時代を代表するような豪華な執筆陣である。

この特集中でまず見るべきは、やはり雪嶺の松陰評である。「二十一回猛士五十年祭」であろう。雪嶺は蘇峰が削除したマッツィニとの対比をあらためて行う。松陰がその生涯を全うしていたら、いかなる道を行んだかを推測する中で、「幕府を破壊して王政の興復に努むるも、後ち議の同僚と協はず、画策に次ぐに画策を以てするが如きあらば、或る点に於てマヂニと併せ視るべき無しとせず。而もマヂニの友と絶つに反し、頗る友情に篤く、友と終始する跡あるを観れば、経歴の大に異なるべきをも考え得ざるに非ず」と評すのである。

あるいは、松陰の性格が「事実には是れし所に據れば、衆と和して安逸を偷むよりも国家の為に身を危くするの傾向ある」とし、もし維新後に生きたとしても「不遇に終はるべき数なり」と見た。「数」とは、「さだめ」「運命」のことである。僅か四ページの短い文章ではあるが、つねに在野の立場に徹し、藩閥政府批判に終始した雪嶺らしい松陰評だ。

雪嶺は現実の政局や時勢への関心は強かったが、つねに世俗とは一線を画そうとした。東京帝国大学の学生時代に哲学を専攻したことや、ほとんど主宰するに近かった『日本人』では、経営にタッチしなかったところに、そういう姿勢が良くあらわれている。利益追求の資本主義が展開する流れの中で、国粹主義をもって対抗していたのだ。

そうした雪嶺の衰えることを知らない精神は、この松陰評からもうかがう事が出来よう。同時に蘇峰著の改訂版と比べることで、その魅力はさらに際立って見えるのだ。だから田中彰「吉田松陰象の変遷」(中央公論社『日本の名著』31吉田松陰)昭和四十八年、所収)では、この雪嶺の文章を「ここにはなお、蘇峰『吉田松陰』元版における松陰像が尾を引いている、といえるかもしれない」と評す。雪嶺の面目躍如たるものがある。

『日本及日本人』松陰号が出た当時は、没後半世紀を経たとはいえ、松陰の面影を知る者はまだ存命しており、その「生の声」を聞くことが可能だった。本誌に紹介された門下生野村靖や妹千代の回顧談は、いまや史料として松陰を語る際にしばしば引用される。

そのような時代の空気を吸いながら編まれたこの特集は、特に明治後期の「松陰像」を知る上で不可欠の文献であることは間違いない。だが、発行からすでに九十年余も経っており、雑誌という性格上、今日、保存されている冊数も決して多くはないと思われる。しかも紙質も製本も、お世辞にも良いとは言えない。復刻して後世に伝える意義は大きいと言えるだろう。

目次

文政十年の詔書(写真)	一
題詞	二
二十一回猛士五十年祭・三宅雪嶺	七
吉田松陰(薩摩琵琶歌)池邊義象	四
吉田松陰先生	一
吉田松陰先生	三
吉田松陰先生の神髓	二九
吉田松陰先生の薫化	三三
吉田松陰先生の事蹟に就て中原邦平	三六
松陰四十年	五四
吉田松陰肖像由来記	六五
頭のかげ吉田大入と父の会合	六八
松陰先生の令妹を訪ふ	七〇
大和五條に於ける吉田松陰	七七
松陰神社	八五

附録(上)

杉恬齋先生傳	九一
玉木玉鑑先生傳	九五
松陰先生年譜略	九七
松陰先生遺著目録	一〇一
吉日録	一〇二
討賊始末	一五
廻浦紀略	三〇
東遊日記	三五
西遊日記	四〇
縛吾集	六八
涙松集	七〇
松陰先生東行送別詩歌集	七四

附録(下)

入江子遠遺稿抄録	七九
高杉東行遺稿抄録	八一
江戸齋遺集抄録	八三
一燈錢申合	八六
風簷遺草	八七
佐久間象山の観たる吉田松陰	八九

■明治四十一年十月発行の「日本及日本人臨時増刊」『吉田松陰号』を、そっくりそのまま復刻します。

■松陰像は明治・大正・昭和・平成と、時代の潮流につれて大きく変遷しています。この「松陰号」は明治に生きた人たちの松陰像を代表する貴重な文献です。

■復刻にあたっては、一坂太郎氏による解説(上記の文章をさらに充実させ、執筆者の紹介を加えたもの)を付し、保存用ケースを新しく作りました。

■限定番号は入りませんが、五百部しか作りません。早めにお求め下さい。

■体裁 B5判二〇八頁

並装箱入

■定価 五千円(¥340)

■予約特価 四千円(¥サービス)

■特価締切 12年10月31日

■発売 12年10月上旬

限定五百部復刻

徳山市銀座の一三 マツノ書店

〇八三四〇二九五